



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



Yet... Joy! Hope! Gratitude!

信仰生活の手本を求めて京泊へ

今年の福者レオ税所七右衛門殉教祭

薩摩の殉教者レオ税所七右衛門の殉教を記念し、その熱き信仰に倣おうとする「福者レオ税所七右衛門殉教祭」が11月3日(金)、福者が受洗した京泊教会の跡地(薩摩川内市)であった。この日、川内港に集合した1200人あまりの信者たちは、ロザリオの祈りを唱えながら教会跡地の小高い丘の上まで巡礼行列し、その後、司教とともにミサをささげ、殉教者に倣って送る信仰生活について学んだ。

今年の殉教祭 今年の「福者レオ税所七右衛門殉教祭」を準備してきた教区巡礼委員会(委員長・鄭法鐘神父)は、これまでの日程や開催場所を見直しての実施を決めた。これまで同殉教祭は、レオ七右衛門が殉教した11月17日に近い日曜日に開催されてきたが、「開催日を固定したい」との思いから文化の日の11月3日の実施を決めた。またこれまで福者が

受洗した京泊教会の跡地への巡礼と祈り、そして川内教会での講演などとミサの構成だった式典を京泊教会跡地に近い川内港からの巡礼と教会跡地でのミサとして実施した。午前11時40分、集まった信者たちは祈りを唱えながら、教会跡地までの道のりを行列して進んだ。住宅街を抜けた後の細い山道は高齢者には少々きつかったようだが、それでも壮年たちが草刈りな

どの作業をして幾分歩きやすく整備してくれていた。行列終了後、午後12時20分からささげられたミサは、郡山司教と8人の司祭が司式、これに終身助祭1人が奉仕した。またこの日のミサの中では、朗読奉仕者の選任式があり、川内教会所属の小島芳武さんが選任された。ミサの説教で郡山司教は、レオ七右衛門が受洗した当時の公教要理を振り返り、

の後、聖書を手渡して選任を終えた。ミサ中は時折、小雨に見舞われたものの少しづつ参列者が減っていた殉教祭に新たな息吹が吹き込まれた感じがする野外ミサとなった。

税所七右衛門

薩摩の殉教者と称えらるる「レオ税所七右衛門」は、1569年都城に生まれた。27歳のとき、主君である北郷加賀守三久に伴い、新しい領地・平佐(現在の薩摩川内市)に移ってきた。キリスト教に興味を持ったのは、友人で既に受洗していたパウロ吉右衛門の影響。間もなく教会に通うことになり、京泊の教会と七右衛門の自宅を要理の勉強が行われた。要理を教えたのはモラレス神父、洗礼を受けたのはオルファネル神父、受洗の日にはマグダラの聖マリアの祝日(1608年7月22日)だった。

當時は伴天連禁止令(1587年)のもとにあったものの、島津はあえてキリスト教を禁止はしていなかった。しかし貿易に協力的でなかったドミニコ会に対しての風当たりは徐々に強くなってきており、平佐の領主・北郷加賀守はレオを含む4人のキリシタン家臣に信仰を棄てるよう命じた。1人はその命令を受け入れたが、レオを含む3人はそれを断った。その結果、北郷加賀守はそのうちの旧臣のレオを見せしめのために尋問。レオには友人たちからも「表面上だけでも命令に従うように」との勧めもあったが、レオは「他のことなら殿に従うことができるが、信仰を棄てることはできない」と答えた。そのため11月16日、北郷加賀守はレオの処刑を決定。翌17日に自宅近くの十字路で斬首刑に処した。処刑に当たってレオは白装束を身にまとい、ロザリオを手首に巻

き、静かに祈った後、頭を垂れて首を差し出した。39歳だった。2008年11月24日、列福された。

京泊教会

1602年7月、ドミニコ会の最初の宣教師が下鶴島は長浜に上陸。彼らはその後3年にわたり宣教活動を続け、1605年8月、里村に教会を建てるに至った。しかし献堂式の数日後、この教会は台風のため倒れてしまった。この現状に島津家久はドミニコ会に川内川河口の京泊に移転することを許可。そこで彼らは町から少し離れた丘の上に聖ドミニコにささげられた教会を建設(1606年6月)し、布教活動に邁進したのである。教会の建設に使用された資材は、里村にあった教会に使われていたもので、ドミニコ会が引き揚げる1609年5月まで修道院とともに建っていたという。

東京大司教に菊地司教

10月25日(水)、教皇フランシスコは、岡田武夫大司教(東京教区・76歳)の退任願いを受理し、その後任に新潟教区の菊地功司教(59歳・神言修道会)を任命した。着座式は、12月16日(土)午前11時から東京カテドラル・聖マリア大聖堂である。菊地被選司教は1958年、岩手県宮古市の生まれ。1986年に司祭に叙階され、それから8年、ガナナに派遣された。帰国後1999年からは神言修道会日本管区管区長に就任。2004年9月20日に新潟司教として叙階された。現在はカリタスジャパンの責任司教で国際的にも活躍している。

一 募金の導入を検討

長崎教会管区司教会議

長崎教会管区司教会議が11月8日(水)から、9日(木)まで那覇教区本部署務局で開催された。主な議題は、次の通り。

① 昨年開かれた長崎教会管区司祭集会で出された「司教団への要望」への対応

② 現在検討されている日本カトリック神学院キャンパス統合問題について 議題①では、司祭の人事交流は一方的派遣ではなく、交換が望ましいこと。沖縄の基地・平和問題は管区の課題として共有することなどを確認した。

また、災害に備え、長崎大司教区で実施している

大槌ベースを来年3月閉所

東日本大震災復興支援担当者会議

長崎教会管区復興支援担当者会議(担当司教は浜口大分司教)が10月2日(月)、福岡コレジオで開かれた。

この中で、今年度で閉所が決まった大槌ベース閉所式ミサを来年3月12日(月)に行うこと、今後は、管区レベルでの災害対応チームが必要であること

教区人事

▼松永正男神父(コンベンツアル会・古田町教会主任司祭)は、現職のまま奄美大島地区長

3月16日（水）小郡―厚狭：約30km

午前9時半ごろ、小郡を発つ。特にこれと言った印象に乏しい道。とは言え、情趣に乏しいということ、身の危険なら常時覚えている。尋常でない速度で車両は飛ばして来る。

国道を離れ、旧道を船木の集落に入つてようやく安堵。と思いきや、ふたたび国道。西見峠を越え、旧道へ。ふたたび安堵。古い造り酒屋などが並ぶ。

午後5時、厚狭着。きょう一日、思いにめぐったこと。この旅に出るまで、イエズス会士と言えば、教皇の兵士、対抗宗教改革の闘士、エリート主義といったイメージがつきまといっていた。かつて同僚の神学生は言った。「イエズス会には愛がない」。

だが、そんなイメージをこの旅はことごとく払拭してくれた。野宿も辞さないつもりで計画したこの旅。ところがきょうまで、寝食に難渋することなく済んだのは、東京の神学院で働くイエズス会士コリンズ神父のお蔭である。「鹿兒島の神学生が歩くから、お願いできないか」と電話してくれした。またこれに呼応した大阪教区や広島教区で働くイエズス会士たちのお蔭である。皆、とても優しくかつた。さっぱりとした男らしい愛に溢れていた。

3月17日（木）厚狭―門司：約33km（航路含めず）

午前8時30分、厚狭を発つ。絵に描いたような、長閑な里山風景の中を旧道は行く。福田にきた。ここから先、経路は吉田へと北西に。倉敷教会の野中神父に

よれば、経路通りに行ったところ、途中で道が途絶え、一時間余り道を捜したものの結局、引き返したという。

分岐点の近くで、畑仕事をしている婦人に尋ねた。「昔は田を（山の）上の方まで作っていたから通れただけ、人があまり入らなくなつてからは猪やら雑草やらで荒れてしまつて。いまは地元のものもわざわざ行かないから」。

神父の助言に従つた方が無難と判断、殖生へと南下する道を択んだ。殖生駅前を過ぎ、伝説・和泉式部の墓を見る。和泉式部は平安中期の、情熱的な女流歌人。和泉守橘道貞に嫁して小式部内侍を生み、のち離別して中宮

諏訪勝郎神学生の「僕の長崎への道」

日本二十六聖人の道を歩いて (15)

彰子に仕え、さらに藤原保昌に嫁した。「和泉式部日記」では、中宮に仕えたころの、冷泉院の皇子敦道親王との恋愛生活を、和歌・散文を織りませ描いている。恋多き女として知られ、紫式部は「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」（「紫式部日記」第48段）と眉を擡める。

しかし紫式部も脱帽するほどの、文才と歌心とを有した。「うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。：中略：口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし」（同）。小倉百人一首に採

録の「あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな」（「後拾遺集」）に、恋多き女の多情多恨の生を垣間見ようか。だが、それは淫乱というには廉直な、深い情ゆえと思われ。「とどめおきて誰をあはれと思ふらむ子はまさらむ子はまさりけり」（同）。天折したわが子、小式部を悼む歌に母性の直截な心が滲む。

小式部内侍も当時、一流の歌詠みと知られた。が、母和泉式部が代作しているとの心ない噂が。保昌の赴任先である丹後に式部が住んだ頃、歌合の席上、四条中納言（藤原定頼）が「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ」（「十訓

毛利家邸跡、功山寺を過ぎ、緩い傾斜の峠を越える。―と、海がひらけた。関門海峡だ。壇之浦が目前に。

「すでに源平両方陣をあはせて時をつくる。上は梵天までもきこえ、下は海龍神までもおどろくらんとぞおぼえける」（「平家物語」巻第十一「鶏合壇浦合戦」）。

源平の決戦の海は、季節柄か、波騒が耳をうつ。強者どもの大音声を想う。また齢八歳の安徳天皇が、二位の尼に抱かれておかくれにされたのも、この波濤であつたかと沖を眺む。「悲しき哉、無常の春の風、忽ちに花の御すがたをちらし、なさけなきかな、分段のあらし浪、玉体を沈

抄」と擲楡。即座に、「大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」（「金葉集」）と小式部が詠んで返したとの逸話はあまりに名高い。小式部の機智はさりとて、母への思慕が偲ばれる。先の哀歌も鑑みれば、母娘に通い合う直情を見るかである。

たぶん爛熟した宮中文化にあつて、和泉式部はその美貌と才能と奔放から、やつかみを買つたと思われ。「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月」（「拾遺集」）。式部が性空上人に送った結縁歌だ。これほど深い霊性を表現しうるころを湛えた歌人なのである。小月を経て長府へ。長府

でも、この旅で五度目ともなれば、雨に打たれるのもまんざらではない。「巷に雨の降るごとく／わが心にも涙ふる」（ヴェルレーヌ）。こうした気取りは、僕の心情からほど遠い。「降る雨は降るし／倒れる稲はたおれる／たとえ百分の一しかない蓋然が／いま眼の前にあらわれて／どういう結果になろうとも／おれはどこにも逃げられない」（宮沢賢治「春と修羅」第三集、作品第一〇八番）。

むしろこちらが相応しかろう。いまはただ、歩くだけのことである。雨具の頭巾を被り、一心に歩いてきたからか。小倉を過ぎ、気がついたら道を誤っていた。いまさら引き返すのは億劫だ。小倉・赤間の経路は諸説。実のところ、その詳細は分かっていない。このまま赤間に向かつて、行けるところまで行こうと決めた。

八幡、黒崎と経る。ユネスコ世界遺産に指定された製鉄所。日本の近代化の端緒にして、象徴のひとつ。近現代を否定するつもりはない。だが目の前にする遺構は、やはり人間のスケールを超え、不自然に思われる。かつて人間の思いの外が超自然であったころの幸福を想うのである。

水巻に出る。十字架が。事前に連絡を入れていなかったにもかかわらず、水巻教会のマール神父は快く迎えてくれた。飲み物と果物をご馳走になる。

この時点で午後5時を過ぎていた。雨も降っていない。それでも、もう少し距離を伸ばしておきたい思いがまさった。遠賀川を渡る。赤間より10kmほど手前の遠賀まで。

3月18日（金）門司―遠賀：約30km

午前10時、門司を出る。雨。雨の中を歩くのは、あまり気乗りしない。それ

月刊『福音宣教』2018年のご案内

年間テーマ「いのち息づくところ」

●新連載 インタビュー「あなたのまなざしに聴く」聞き手・原敬子（援助修道会会員）、「福音家族」晴佐久昌英（東京教区司祭）、「時の階段を下りながら」三好千春（援助修道会会員）、「行け、音よ翼に乗って」三澤洋史（指揮者）、「私たちのかけがえのない家で」吉川まみ（上智大学神学部講師）、「イエスが出会った女性たち」（4月号から）山口里子（聖書学者）※詳細はホームページをご覧ください。

号)、1部540円(税込・送料別)。年間定期購読料6,300円(税・送料込)。

＜お申し込み＞郵便振替用紙にて年間定期購読料をお振込みください。振替口座番号：00170-2-84745 加入者名：オリエンズ宗教研究所

＜お問い合わせ＞オリエンズ宗教研究所 Tel：03-3322-7601 Fax：03-3325-5322 http://www.oriens.or.jp

年11回発行（8・9月合併

カトリック通信講座

1972年開設以来、入門への第一歩として、また信者の学び直し、黙想の助けとしてご好評いただいております。

＜全7講座＞

- T001 キリスト教とは＝日本の宗教観に照らして学ぶキリスト教の概要。
- T002 聖書入門〔I〕＝四福音書を通してイエスの生涯をたどる。
- T003 キリスト教入門＝キリスト教の秘跡や信仰生活について学ぶ。
- T004 神・発見の手引＝人生、自然を通して神の呼び声に耳を傾ける。
- T005 聖書入門〔II〕＝使徒の働きとその手紙、黙示録について学ぶ。
- T006 幸せな結婚＝カトリックにおける結婚の意味や愛、幸福とは？
- T007 生きること・死ぬること＝老いや命、旅立つ人に寄りそうケアについ

て考える。

＜受講料＞（教材費・税込）
T001～T004 各4800円
T005～T007 各5300円

＜お申込み＞

郵便振替用紙にご希望の講座名・講座番号（T001～T007）をご記入のうえ、下記にお振込みください。入金確認後教材をお送り致します。振替口座番号：00170-2-84745 加入者名：オリエンズ宗教研究所

＜お問い合わせ＞

オリエンズ宗教研究所 カトリック通信講座
Tel：03-3322-7601
Fax：03-3325-5322
詳細はホームページをご覧ください。
http://www.oriens.or.jp

納骨堂を祝別、また先輩たちのために祈る

カトリック唐湊墓地で死者のためのミサ

11月5日(日)、カトリック唐湊墓地で毎年恒例の死者のためのミサがささげられ、また完成したばかりの納骨堂の祝別がなされた。

好天に恵まれたこの日、唐湊墓地に集まった信者は約60人。午後2時からまず泉浩二神父によって納骨堂



が祝別され、その後、ミサとなった。ミサを司式したのは5人の司祭。

説教した泉神父は、最近語り合ったという田邊徹神父の昔話から彼の人のかわりの多さに触れ、司祭墓地に眠る司祭、司祭たちが、そしてこの墓地に葬られた多くの人たちがどれだけの人々のかかわりを持ったのだらうと振り返った。その上で、人は人と「かわること」で、「気づき、気づかせて」もらう。また私たちはキリストにかかわること、多くの気づきをもたらした。キリストは「一人も失わないで復活させる」ことも気づかせてくれた。今日ここに集まった人もすでに亡くなった人も、復活させてもらえぬ。私たちは生きていても死んでしまった者も聖徒の交わりを通してキリスト

ザビエルに司教団 日韓司教交流ミサ

恒例の日韓司教交流が11月14日、16日まで霧島市のホテルで開かれ、締めくくりにザビエル記念聖堂でささげられた。

23回目となった今年の交流会には日韓両国から40人を超える司教らが出席、韓国側からの講演(韓国カトリック教会における高齢者への司牧的ケアの現場と課題)や日本側からの講演(高齢者と教会の深刻な格差社会の中で)を聞き、その後の質疑応答でお互いの理解を深めた。



今回の交流会にはオプショナルツアーとして指宿の宿泊(13日)もあったほか、14日には沈寿官窯、ザビエル上陸記念碑、福昌寺跡見学もあった。

を形作るという役割を持っている。ぶどうの木のように互いに支え合いキリスト

担当者報告

カリタスジャパン

カリタスジャパン定例全国担当者会議が10月24日(火)と25日(水)、福岡教区の司教座教会である大名町教会であった。初日の24日はまず菊池司教が挨拶し、パチカンからフィロニー枢機卿(福音宣教省長官)が来日した際の被災地視察の様子を報告。

に結ばれている。私たちが死者のために祈るのは、故人が準備された道を先に歩いている先輩だからだ。だからこそ私たちは故人の分までも日々の信仰生活を懸命に生きなければならぬと語った

の充実」。教区内のネットワーク強化のために教区ごとに状況を把握し、草の根の活動を行っているグループや団体の発掘、状況の共有、連携できる体制を整えることを目指している。すでに大阪教区や大分教区をモデル教区に指定し、取り組みを始めている。

その上で、「各地でのカリタスの働きは評価されている。これからは日本全国で、災害支援に限らず福祉など様々な活動を、信仰の信念に基づき愛の奉仕を続けて欲しい」と語った。今回の議題は①カリタスジャパン3年計画、②排除ZEROキャンペーン、③2018年四旬節キャンペーンについての三つ。

①で取り組むのは「つながる仕組みづくり」と「広報」、それに「プログラム

司教執務室便り 出かける教会を目指して

去る11月8日、9日の2日間、那覇教区カテドラルで長崎教会管区司教・事務局長会議が開催され、昨年の管区司教集會で出された「司教団への要望書」に添えるべく熱心な討議がなされた。その時のことを少し紹介したい。

教区が多すぎて人的経済的負担が大きいという指摘のもとで、教区再編が論じられて久しい。先月の会議では、再編を論じる前に、まず、宣教する小教区作りが先ではないかということが一致した。この件に関して提示された資料は、1994年から2014年までの10年間にわたる五教区の教勢一覧。信徒総数をはじめ幼児洗礼、成人洗礼の変動が示されていて、それによると各教区が軒並み減少する中で唯一那覇教区だけが増加。

ちなみに、鹿兒島教区の場合をみると、1994年の幼児洗礼は61人、成人洗礼は92人。10年後の2014年は幼児洗礼27人でほぼ半減、成人洗礼は34人でほぼ三分の一に激減。前述の那覇教区の信徒総数はこれまで

の5千人台から2014年には一気に6千人台に突入し上昇中。何よりも目を引いたのは成人洗礼の数だ。鹿兒島教区の34人をはるかに凌ぐ50人。幼児洗礼もはるかに多い44人。増加の一途を辿る那覇教区の秘密は何か。司教さんの口から聞くことはできなかったが、「信徒が頑張ったから」という当たり前のことに帰結するに違いない。

教皇フランシスコが説かれる「出かける教会」となって宣教する小教区、宣教する家庭、宣教する夫婦、宣教する個人を目指して知恵を絞る必要がある。とりあえず、クリスマスも近いことだし、「この友達がイエス様と出会えますように」との祈りを始め、ご降誕のミサに招待する計画を各家庭で巡らしてほしい。

紹介したいことは他にもあるが、長崎教区発の一葉募金についてぜひ触れておきたい。一葉とはおかず一品分を我慢して捧げるということ、災害などの非常事態下に置かれた人や地域に使ってもらいたいというもの。毎週金曜日を償いの日と決めて各家庭に上げて取り組んでいるという。素晴らしい愛の業だ。鹿兒島でも是非呼びかけたい。



会と催し 12月

2日(土) マリッジエンカウンター・教区本部・13時30分
3日(日) 待降節第1主日

▼竹山神父金祝感謝ミサ・カテドラル・14時
▼宣教地召命促進の日(献金)

キリストを知らない人に救いの福音を伝えることは、キリスト者一人ひとりに課せられた使命であり、神からの呼びかけにこたえること(召命)です。それゆえ、宣教地である日本において、すべての信徒がその使命を果たせるよう、また宣教に従事する司祭・修道者がよりいっそう増えるよう祈ることは、とても大切なことです。

この日、わたしたちは、世界中の宣教地における召命促進のために祈り、犠牲をささげます。当日の献金はローマ教皇庁に集められ、全世界の宣教地の司祭養成のための援助金として送られます。

▼小川靖忠神父叙階記念(1972年)
▼中野裕明神父、丸野六雄神父、関根悦雄神父、萩原義幸神父、浜崎真実神父霊名(聖ザビエル)

6日(水) 墓地委員会・教区本部・19時
7日(木) ヴィデンマン神父命日(2006年)

8日(金) 無原罪の聖マリア
10日(日) 待降節第2主日

▼糸永真一司教命日(2016年)
16日(土) 正義と平和協議会・教区本部・13時

17日(日) 待降節第3主日
19日(火) 有馬信茂神父命日(2007年)

▼教区巡礼委員会・教区本部・19時
23日(土) 松永正男神父叙階記念(1969年)

24日(日) 待降節第4主日
▼オリブの会・教区本部・14時

25日(月) 主の降誕
26日(火) 聖ステファノ殉教者

27日(水) 聖ヨハネ使徒福音記者
▼田邊徹神父、寝占敦之神父、山口好信神父、末吉卓也神父霊名(聖ヨハネ)

28日(木) 幼子殉教者
▼教区本部事務所仕事納め・4日

31日(日) 聖家族

祈りの意向
【祈祷の使徒会】
世界共通 高齢者たち
日本の教会 難病治療の支援

黙想会(イエスとの関係)のご案内

日時: 12月15日(金) 18時~17日(日) 16時
場所: マリア山荘 指導: キップス神父
参加費: 1万5千円(宿泊・食事代含む)
※どなたでも参加可。3日間の参加に都合のつかない方は、1日もしくは2日の参加も可能です。お問い合わせください。
申込先: 福沢智子 ☎090(2083)9223

2017年 聖書学校感想文

テーマ「みんな神さまの子ども」を体験して

8月2日から4日まで鹿児島市唐湊の司教館で開かれた第5回「聖書学校」(夏休み子ども大会)に10人の子供達が参加。教区報では子供達の感想を紹介する。

一日目は、教会めぐりをして谷山教会は、絵がそろってすごかったです。

二日目は、げきをしました。げきをするまえに、何がだめか、何がいいかを話し合いました。げきはたのしかったです。べんきょう会でテーマを思い出したり、歌を歌ったり、せいしよのことばを書いたりしました。プールにも行きました。

三日目は、さんぽに行っておはかまで行きました。おはかちゃんのおはかの近くでした。0さいでなくあった赤ちゃんのおはかもあり、かわいそうでした。生きていくことがうれいです。世界中のこどもやおとな



が神さまの子どもだとほめて知りました。神さまはおとなより子どものほうがすきだとはじめて知りませんでした。つぎもさんかしたいです。(鴨池教会 泉穂乃花 2年生)

で亡くなった人。赤ちゃんで亡くなった子のおはかもありました。

最後に、このテーマの意味は、みんな神さまに愛されていると感じました。(玉里教会 福留美日路 4年生)

私は、聖書学校を通してみんな神さまの子どもということであらためて実感しました。私たちは、聖書のことばの勉強をし、げきをしました。初めに神父さまとおにいちゃん、おねえちゃんたちがげきをしてくれました。

そのげきは、ご飯を食べる時のげきで、いつも私の家族のご飯の時みたいに、

いろいろなお話をして味わって食べているのでなく、おにいちゃんとおねえちゃん、スマホを見ながら食べていておいしく味わっていませんでした。

お母さん役のリーダーが話しかけてもほとんど無視して、ほとんど会話のない食事でした。私は、せっかくなの大切な家族との時間なのにお母さんが作ったご飯をおいしく味わって食べていないと思いました。

でもみんな心の戸口を開けば、楽しく会話ができます。

私達は、聖書学校を通してみんな神さまの子どもということであらためて実感しました。私たちは、聖書のことばの勉強をし、げきをしました。初めに神父さまとおにいちゃん、おねえちゃんたちがげきをしてくれました。

そのげきは、ご飯を食べる時のげきで、いつも私の家族のご飯の時みたいに、

いろいろなお話をして味わって食べているのでなく、おにいちゃんとおねえちゃん、スマホを見ながら食べていておいしく味わっていませんでした。

お母さん役のリーダーが話しかけてもほとんど無視して、ほとんど会話のない食事でした。私は、せっかくなの大切な家族との時間なのにお母さんが作ったご飯をおいしく味わって食べていないと思いました。

でもみんな心の戸口を開けば、楽しく会話ができます。

私は、聖書学校を通してみんな神さまの子どもということであらためて実感しました。私たちは、聖書のことばの勉強をし、げきをしました。初めに神父さまとおにいちゃん、おねえちゃんたちがげきをしてくれました。

そのげきは、ご飯を食べる時のげきで、いつも私の家族のご飯の時みたいに、

いろいろなお話をして味わって食べているのでなく、おにいちゃんとおねえちゃん、スマホを見ながら食べていておいしく味わっていませんでした。

KJP (鹿児島正義と平和協議会) 通信 12月号

奄美大島に於けるカトリック迫害の歴史(3)

陸軍の幹部候補生、大熊出身の泉豊光は東京で学んだ後、1931(昭和11)年、奄美に帰ってきた。神父が去り、教会が閉ざされて、信者のほとんどが「転向」していったので、迫害の実態を調べて報告書にまとめ、カトリック中央出版部に郵送した。報告書は検閲

を受け、没収された。のちに泉は「反乱軍反国家的な言動をとった」して、二等兵に降格された。

教会の建物自体も受難した。1934(昭和9)年12月、竜郷町の秋名教会は地元青年団員に襲撃された。

青年たちはノコギリ、ハンマー、鉄棒などで教会の窓、屋根、柱、十字架を破壊し、使用不可能な状態にした。主犯格5人に鹿児島地裁は懲役6か月、執行猶予2年を言い渡した。しかし判決を報じる鹿児島朝日新聞は、彼らを「祖国愛に目覚めた南方大島の青年達」と称えた。

1937年(昭和12年)頃、大笠利教会は火事で焼け落ちた。教会がつくっていた医療診療所も幼稚園も焼けた。「軍にそのかさされたあ人物が放火した」と噂されたがはつきりしなかった。

名瀬で米屋を営んでいた青江清道は、1934(昭和9)年頃、迫害がひどく「転向」を迫られたが、拒否したため「出て行け」と言われ、宮崎に引越した。しかし半年ほど経って「迫害も収まったらしい」と聞き名瀬に戻った。迫害が収まったのは信者が転向したためで、転向してない青江にとっては半年前の奄美と同じだった。青江の「非転向」によって「防空演習」と称した嫌がらせを受けることになった。

消防団幹部が「爆弾投下」と叫びながら赤い布を屋根の上に投げると同時に、消防ポンプ車から家めがけ放水する。家の中はめちゃくちゃ。カトリック信者の家を標的にした「防空演習」であった。

まず助産婦の福永熊千代の家、靴屋の都成嘉吉郎の

て、いつもよりもっとおいしくいただけます。私は、このことを頭に入れて女の子たちだけでげきをしました。私は、お父さん役で話をするのが難しかったけど、みんなの心の戸口を開けるような楽しい会話をしようと思いついて、楽しんでました。

このテーマのことや聖書のことばについて、楽しく学ぶことができました。これからは神さまのことを思っ、ミサに行きたいと思っています。(ザビエル教会 向井乃子 6年生)

家、そして翌日、青江商店、碓山商店のほか2軒ほどが放水を受けたという。

一番早く国家に忠誠を尽くすことになってしまった。これはバチカンとナチスドイツの関係なども影響していることである。

短歌
鹿児島純心 川上和
ひじりらのささげし命
新たにされ白衣の輝き
勝利のあかし
俳句
コスモスや明日への夢
を描いている

+KABAYAN SEKSYON+
Eukaristiya at Pamamahala sa Kalikasan
Ang reporma ng Vaticano II sa Misa, gaya ng nasasaad sa teksto ng Kongresong Eukaristiko sa Cebu, "ay nagkabit ng mga pormula ng panalangin batay sa mga panalangin sa mesa ng mga Hudyo hanggang sa galaw na pagdadala ng mga handog sa altar."
Ang namumuno sa Misa ay naghahanda ng mga handog, at nananalangin: "Kapuri-puri ka, Diyos Amang Lumikha sa sanlibutan. Sa iyong kagandahang-loob, narito ang aming maiaalay. Mula sa lupa at bunga ng aming paggawa ang tinapay [alal] na ito para maging pagkaing nagbibigay-buhay [inumang nagbibigay ng iyong Espiritu]."
Sa mga panalangin ito pinupuri natin ang Diyos sa paglikha sa daigdig at pati na rin ang papel ng pakikipagtulungan ng tao sa paggawa ng tinapay at alak.
Ang mga natural na simbolo ng pagkain at kapatiran ang siyang magiging mismong materyal ng buhay ni Kristo at presensyang nagbibigay-buhay sa pamayanang Kristiyano at sa lalong malawak nilang mundo.
Naglalaman din ang mga panalangin ito ng "paghahayo sa misyon bilang mga propeta. Ang pagsamba ay hindi maaaring maging lingid sa pagmamalasakit sa kapaligiran at mga natural na yaman...Ang pagpupuri sa Panginoon, Diyos ng sangnilikha ay kailangang humantong sa pagtataas ng isang tinig ng propeta laban sa kasakiman ng mga puso at kamay ng tao para ipagtanggol ang daigdig at ang kanyang yaman.
Ang kalikasan ay nilikha ng Diyos at ibinigay ang pamamahala sa tao. Dito malalaman at mararanasan ng tao na sa nakikitang mga kalikasan ay makikilala din ang Diyos na makapangyarihan sa lahat na ibinahagi sa atin ang kanilang buhay sa atin diyan sa kanyang Bugtong na Anak na si Hesukristo na ating Panginoon. Amen
Katekismo sa Taon ng Habag (Fr. Dino Orolfo)

1946(昭和21)年3月、奄美は沖縄とともに日本本土から行政分離され、直接、米軍政下に置かれた。そしてその年の7月、かつて名瀬の教会にいたガブリエル神父が奄美を視察に訪れた。奄美の外国人神父が追い出されて以来、12年ぶりのことだった。

信者の戻った教会は、聖堂を再建し、図書館、診療所、孤児院などもつくり発展していった。

奄美のカトリック迫害と同じ頃、上智大学や暁星中なども軍による迫害を受け、カトリック教会は日本のキリスト教、プロテスタントの中で

私たちが特に注意しなければならぬのはメディアの問題である。メディアは情報操作にかなり利用されていることを忘れてはならない。現在も国際関係が不安定で、我が国もあの時代と同じ方向に行ってしまうのではないかと危惧される。迫害を耐え忍んだ奄美の先輩方に感謝するとともに、過去の歴史を忘れることなく、将来に責任を担っていきたいと思う。(「J」 指宿教会・永井勲)

定例会の案内

(毎月第三土曜日)
日時...12月16日(土) 13時~15時
場所...教区本部